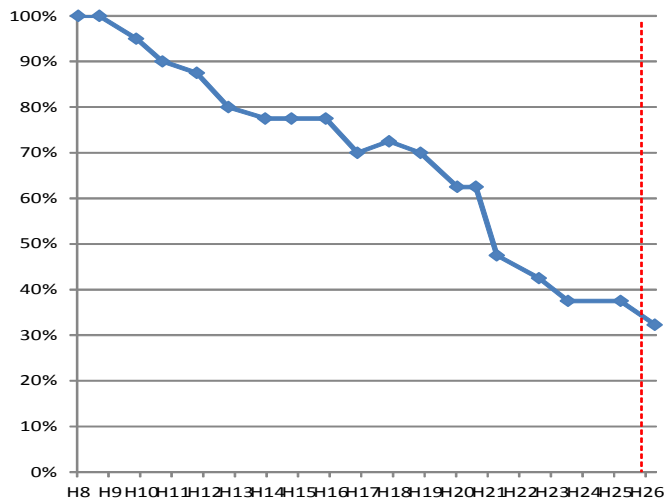


樹種名	イタヤカエデ		
科 目	カエデ科		
学 名	<i>Acer pictum</i>		
分 布	東アジアに広く分布し、日本には 8 亜種が認められ、イタヤカエデはその総称的な名である。		
樹木特性	半陰樹であり、太い枝を出し、大きく広がった樹冠となる。雄雌同株で 4~5 月に葉が開くと同時に黄緑の花をつける。 9 月頃に果実熟し、冬にかけて、二又の翅で風にのって回りながら落下する。葉は手のひら形をしていて秋には落葉する。		
用 途	材は、建築、器具、ハーモニカなどの楽器、車両、床柱などの装飾材、ボーリングのピンなどに利用。	  	
植栽本数/面積 (植栽密度)	201 本／ 0.05ha (4,000 本／ ha)		
特 徴	【樹 形】 落葉高木であり、山地に生え、15~20m になる。春に葉を開く前に、緑黄色の小さな花を、枝先にたくさんつけるので、黄色い霞がかかったように見える。 樹皮は暗灰色で、縦縞の模様がわずかにある。老木になると浅く裂ける。 カエデ類は陰樹で、総じてあまり大きくならないが、イタヤカエデは直径 1m になるものもある。材は仕上げ面が美しい。		
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。現存率も 32 % と低く、生育状況も個体によって優劣が見られる。試験地周辺に自生木は見られないことから生育環境が適していないものと考えられた。 植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 5m 程度となっている。		
被 害	シカの好きな樹木であり、幹の剥皮、葉の食害が予想されたが、当試験地では発生していない。 植栽後にコウモリガとカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数 コウモリガ：38 本、カミキリムシ類：58 本)		

イタヤカエデ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 32.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

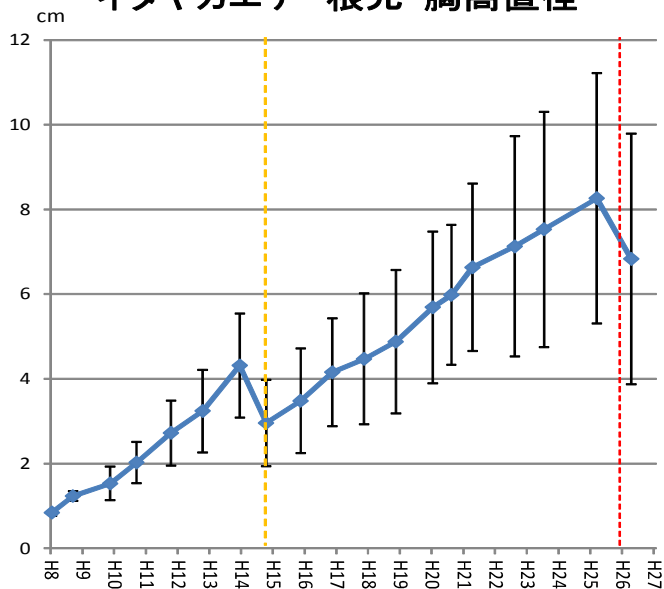
現存している樹木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 6.83 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

イタヤカエデ 根元・胸高直径



【樹 高】

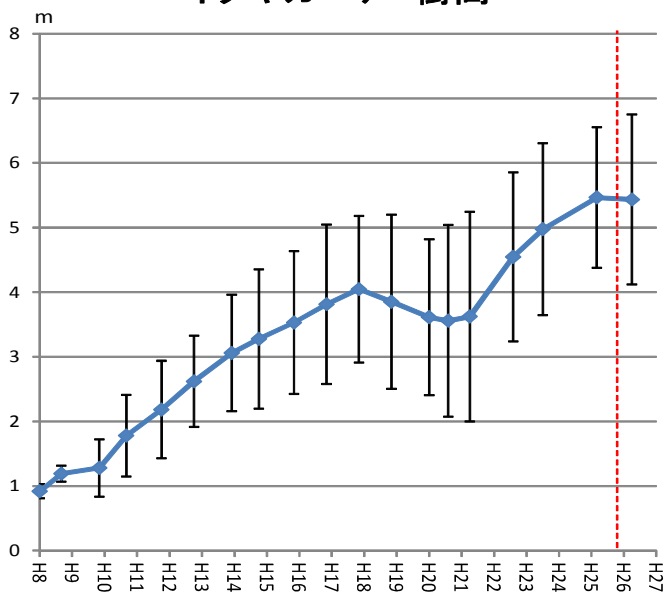
数値が低下している年度は、数値の大きい個体が枯死したことによるものである。

現存している樹木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 5.44m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

イタヤカエデ 樹高



《プチ情報》

エゾイタヤは本州日本海側、北海道からシベリアにかけて分布し、若枝と葉柄基部に微細毛がある。アカイタヤは北海道、本州の日本海側に分布し、全体が無毛、果実は大形である。

オニイタヤは北海道南部から九州にかけて分布し、葉裏に短立毛がある。エンコウカエデ（狭義のイタヤカエデ）は本州から九州にかけて分布し、若木の葉は深裂する。イタヤカエデの近縁種が朝鮮、中国から小アジアにかけて 12 種、ヨーロッパに 3 種ある。雨宿りができるくらいに、葉がよく繁り、板でふいた屋根のようなことからついたとも言われている。